

「お姉ちゃん自治区」

第一章：拾ってはならない落とし物

コンクリートジャングルと呼ばれる某国の首都の片隅で、俺、奏多（かなた）、二十歳の平凡な大学生活は、突如として終わりを告げた。いや、終わりを告げたというより、無理やり新しいチャプターに書き換えられた、と言うべきか。

その日、俺は講義とバイトの疲れを引きずりながら、アパートへの道を歩いていた。夕暮れの光がアスファルトに長い影を落とす中、キラリと何かが光った。道端に落ちていたのは、一枚のICカード。何の変哲もない白いカードだが、中央にはデフォルメされた可愛いロゴと共に、『弟くん登録証』と印字されていた。

「なんだこれ…？ ゲームのアイテムか？」

誰かの落とし物だろうが、警察に届けるのも面倒だ。気まぐれにそれを拾い上げ、自分の財布に滑り込ませた。それが、決して開けてはならないパンドラの箱の鍵だとも知らずに。

翌朝。けたたましいアラームの代わりに、ふわりと甘い香りが鼻腔をくすぐった。重い瞼をこじ開けると、視界に飛び込んできたのは見慣れたシミのある天井ではなく、豪華な天蓋付きベッドのカーテンだった。

「は……？」

飛び起きると、そこはまるでヨーロッパの高級ホテルのような一室だった。柔らかな絨毯、アンティーク調の家具、そして窓の外には見たこともない美しい庭園が広がっている。昨夜、確かに俺はボロいアパートの固い布団で眠ったはずだ。これは、夢か？

「おはようございます、弟くん」

凜とした、しかしどこか甘さの残る声に振り返る。そこに立っていたのは、カッチリとしたスーツに身を包み、知的な眼鏡をかけた女性だった。歳は二十代後半だろうか。整った顔立ちは氷のように冷たい印象を与えるが、その瞳の奥には奇妙な熱が宿っているように見えた。

「だ、誰ですか！？ ここはどこです！？」

「私はお姉ちゃん自治区・管理局の梓（あずさ）と申します。そしてここは、お姉ちゃん自治区。あなたの新しいお家ですよ」

「はあ！？ 自治区？ 家？ 何言ってるんですか！ 誘拐？ 拉致ですか！？」

俺の狼狽ぶりに、梓と名乗る女性は表情一つ変えずに続けた。

「昨日、この『弟くん登録証』を所持しましたね？ その時点で、あなたはこの自治区の住民となることに同意したと見なされます」

「そんな馬鹿な！ ただ拾っただけだぞ！」

「規則ですので」

梓は淡々と、この自治区の常軌を逸したルールを説明し始めた。

ここは、18歳以上の女性しか住民になれない独立自治区。住民は全員が「お姉ちゃん」の役割を担い、男性、すなわち「弟くん」をとことん甘やかすことを憲法で定めているらしい。男性は入国の際に特殊な処置を受け、心身ともに「ショタ」の状態に固定されるのだという。そして、女性は16歳から25歳の美しい姿のまま、年を取らない。

「つまり、俺は…」

「はい。あなたは今日から、私たち全お姉ちゃんの『弟くん』です。あらゆる労働から解放され、ただひたすらに甘やかされる毎日が始まります」

梓は真面目な顔で言っているが、期待に潤んだ瞳が隠しきれていない。何なんだ、この場所は。狂ってる。

「冗談じゃない！ 帰らせろ！」

「残念ながら、一度登録された弟くんは自治区から出ることはできません。さあ、朝食の準備ができています。規則ですので、まずは膝枕で目を覚ましていただきます」

「はあ！？ 膝枕！？」

「本日の担当お姉ちゃんがもうすぐ参りますので。ああ、それと、この自治区での通貨単位は『なでなで』です。お姉ちゃんに甘えて褒めてもらったり、抱きしめてもらったりすることでお支払いも可能ですよ」

理解が追いつかない。通貨が「なでなで」？ 膝枕が義務？ 俺の平穏な日常は、一枚のカードによって、甘くて危険な狂気に満ちた世界へと完全に塗り替えられてしまったのだ。